

アンソロジー  
*anthology*

ね む  
合 歡

*Vol. 14*



# 2015 夏

## 目次

風の中……………	蓮岡健美……………	30
花野忌(夢二の忌)	信里由美子……………	28
ふるさと……………	名木田純子……………	26
春……………	長尾京子……………	24
麦の秋……………	鳥越 棼……………	22
さりげなく……………	富阪宏己……………	20
日を恋ふ……………	谷口利子……………	18
蛙の目借時……………	高城登代……………	16
初時雨……………	角南房子……………	14
初花……………	桜本滋子……………	12
遺影にも……………	梅田光憲……………	10
春……………	植田桂之……………	8
春うらら……………	井上悦男……………	6
空といふ自由……………	石井宏幸……………	4

浅春……………	真木好子……………	32
水温む……………	三宅 進……………	34
花の中……………	山下祐子……………	36
家族……………	與田武彦……………	38
水色……………	米元ひとみ……………	40
逍遙……………	渡辺牛二……………	42
編集後記……………	渡辺牛二……………	44

# 空といふ自由

石井宏幸

陰といふ物の寒さの中にをり  
玻璃へ向く子規の文机春を待つ  
麦踏の端に脱ぎ捨て赤い靴  
童心を指に集めて土筆摘む

お陰様で機会を得、俳壇三月号に半ページで倉敷美観地区吟行句を中心に五句を掲載していただいた。  
中庭は淋しき日向蔦枯るる  
先日、詩歌句という雑誌へも五句と簡単な文章を掲載していただけるお話をいただき、感謝しているところだ。  
俳句を始めて、この秋でもう十年になる。  
多くの人に教えをいただきたい何とが続けることが出来ている。

春の水河馬を沈めてしづかなる  
一隅の日向剥がれて蝶となる  
別の間の別の時間に古雛  
葉桜へ空の漣移り来し  
乗り出して空を探つてゐる毛虫  
繋がれて幟に空といふ自由

野の沖のごとくに昨日青き踏む  
宏幸

# 春うらら

井上悦男

夫婦つていいよねバレンタインの日  
昨日より今日柔らかかき春の風  
春風や抜かるる事の多き坂  
悪ふざけ過ぎたる真夜の浅利かな

しじみ汁窓は西向く木賃宿  
畝立てて脱ぎゐるシャツや春の午後  
柔く裁ち繕ふ指や花水木  
囀やどの口この口減らず口  
路地ひとつ外るる路地や孕み猫  
麗かや何するでなく今日ひと日

# 春

植田桂之

春めくや亀の甲羅の濡れてをり  
春暁を打ち破りたる刻太鼓  
ムスカリの色濃く春の雨上がり  
太陽を野にばらまいてタンポポポ

パノ라마の瀬戸の島々月朧  
山寺や山門くぐり山桜  
背くらべしてゐるごとく松の芯  
ゆつたりと脳の寝てゐる春の昼  
海沿ひを走る銀輪風光る  
青々と伸びたる草の別れ霜

# 遺影にも

梅田光憲

遺影にもうぐひす餅とさくら餅

春雷や遺影の母の瞬かず

春愁や明治の父の硯箱

遺影にも一日はじまる新茶かな

母の日の母の遺影に歳を繰る

鳥取は父のふるさと西瓜買ふ

おとんぼの吾が長男墓洗ふ

注（おとんぼ＝未っ子）

墓洗ふ父を越えしは齡のみ

盆の月砂丘の上に見て戻る

母許の駅にはじまる花野かな

# 初花

桜本滋子

初花を見つけしよりの気のそぞろ  
花三分幻惑のとき秘めるらし  
一山の花に溶け合ふ歩なりけり  
花は今過去も未来も無かりけり

「初」の付く季題には、特に心をときめかせる何かがある。「初音」「初燕」「初花」など、俳句を始めてより、毎年、何時、何処で出合うかは、とても楽しみである。  
ちなみに今年は、3月半ば半田山植物園で鶯、後半に倉敷で桜の花と燕に初めて出会った。  
とりわけ「初花」は、春と共にやってくる素敵な自然からの贈り物のようだ。  
蕾が膨らみ、一花、二花と開花を見守る。三分咲き、五

対岸の船渠空ろに花万朶  
花人として蕉翁の跡たどる  
香を縫うて御室桜を行き戻り  
哲学の道に乱るる花の枝  
深々と花冷夜の蔵王堂  
花散らす風に雀も加担して

分咲き、満開の後には、落花地を染める花びら、時を追って見守る豊かな日々は日本中が明るくなる。  
今年には気温の変化が激しく、桜は急に咲いて丁度見ごろの時に長雨が続き、ゆっくり愛でる間もなく散ってしまったので、何か少し心残りがするようだった。  
来年は、何時どんな桜の花と何処で最初に出合うだろうか、楽しみである。

# 初時雨

角南房子

稲の穂の風に遅るる重さかな  
過疎を吹く白き風あり蕎麦の花  
山荘を閉ぢて露けき道となり  
風の出で野山の錦歌ひだす

一瞬の風を追ひかけ初時雨  
旅人の時雨の似合ふ倉の街  
湖心より暮れてゆくなり鴨の陣  
路地裏にミシン踏む音花八手  
内海に来て空遠き都鳥  
寒林の青空の透け雲の透け

---

家からほど近い所に港があり、冬になると棧橋に驚くほどの百合鷗が来ていた。  
すぐそばの邸宅のドクターが日課のようにエビセンを空にまいて餌付けしていたらしい。

時々餌を持って行くと赤い嘴を棧橋にならべて餌を待っていた。

ある冬から百合鷗の姿を見かけなくなっていた。

聞くところによるとドクターは亡くなられたとのことだった。

---



# 蛙の目借時

高城登代

方円のプチ公園に春の雪  
一列に並びしリュック春の土手  
穴道湖の沖より蜷引き上ぐる  
花見んと寄れば胡乱と猫が向く

校庭の西は春山声返る  
菜種梅雨讃州の池澱みたり  
一時の桜吹雪の美事哉  
机上論途絶え蛙の目借時  
梅雨の前日射なかなか強くあり  
遠く帆は緑の中に入りけり

# 日を恋ふ

谷口利子

音はみな秋の祭となりにつけり  
小鳥来るすいと空気に穴が開く  
秋さうび恋せし日々をわすれまじ  
大吉を握りしめたる初詣

ひと色に溶けて回るや五色独楽  
本尊へ障子ごしなる掌を合はす  
香り立つまで研ぎ上げて柚子刻む  
春寒の時計鏡の中で鳴る  
移りゆく畦焼の火のとびとびに  
土の香を擡げ日を恋ふ名草の芽

# さりげなく

富阪宏己

歩きけり残暑のほてり踏みしめて  
葉の色を抜けて柿の実色づける  
コスモスのクレヨン色に揺れてをり  
秋ここに来てをり宮を歩くなり

静かに吹かれている草が好きだ。  
それを見るのが好きだ。  
高原でもいい。  
海辺でもいい。  
さりげなく、さりげない草を見てみると、妙に落ち着く。そうして、少しだけ人恋しくなる。  
吹かれている草のような人はいないが、その草を見ているときのように、妙に落ち着ける人がいい。  
合歓の会には、そんな人がいる。  
そんな人がいるから、なんと

よろめいて花野の底に埋もれけり  
庭手入して色鳥の来るを待つ  
何落ちし水輪や池の水澄みて  
映りたる色鳥水の底より来  
絵馬増えて初天神の近かりし  
著ぶくれの重たくなりてきし日差

かして合歓の会に出たいと思う。  
出たいから、毎日歩く。  
これだけが仕事のように歩く。  
歩いていると、健康になって、合歓の会に出られるようになるから歩く。  
さりげなく、さりげなく、歩く。

# 麦の秋

鳥越 禁

麦の秋赤屋根続く丘はるか  
万緑に赤きとんがり屋根の里  
麦秋のアウトバーンを小半日  
夏帽子御伽の国へ門くぐる

噴水のマルクト広場馬車往き来  
旅三日サマータイムに慣らされて  
朝涼や湖畔のホテル出で散歩  
中世の古城へ馬車で新樹中  
王宮へ続くマロニエ新樹道  
衛兵と並びカメラに風薫る

# 春

長尾京子

竹馬の高さに見ゆる讃岐富士

初買の五円饅頭ぬくぬくと

悠々と空泳ぐごと冬満月

雨の日のこれもまた良き小正月

藁の香の微かに残りどんど焼く

降る雨に寒木瓜赤くきはだてり

天窓をよぎる雲あり毛糸編む

多島美の煌めく波間春近し

挨拶の華やぐ声や日脚伸ぶ

黒板の一字一字や木の芽吹く

# ふるさと

名木田純子

倉町の涼しき風を見下ろしぬ  
日覆に小さく販ぐ露店かな  
水の黙より睡蓮の風立ちぬ  
緑蔭にロダンの像とともにあり  
遊船をじつと見てゐる車夫の閑  
春雨やしづかに水面広ごりぬ  
白壁に旅の春愁映りをり  
囀や鳥獣 供養塔に雨  
昼灯す画廊に椿投げ入れて  
倉敷は我がふるさとや青き踏む

# 花野忌（夢二の忌）

信里由美子

野にあればこんなに紅き吾亦紅  
色秘めし野葡萄のまだ草のいろ  
秋の蝶刻にとり残されてをり  
蟪蛄の子に揺るるものばかりの世

花野忌へ花野の風を束にせむ  
花野来て花野の果てのカルデラ湖  
秋の湖とは天よりの大しづく  
光る時翳れる時も風の秋  
のぼり来る奈落の風は葛のもの  
山頂は天上の風真葛原

# 風の中

蓮岡健美

本堂に風の道あり南風吹く  
冷房の点滴一点光りをり  
筆談に心通はせ秋灯  
吹き抜けの玻璃に浮かぶや冬の月

野水仙草の高さを咲きにけり  
キラキラと鱗釣りたる風の中  
観音の松の緑や百度石  
躑躅見てつつじに触れつ山路行く  
犇めけるどくだみ木戸を閉ざしけり  
桜蕊参道紅くしてゐたり



# 浅春

真木好子

浅春や少し短く髪を切り  
山々のはざま明るし春の雲  
学童の声乗せ舟のうらけし  
咲き初めの花に笑顔の零れけり  
いちじくの葉に無花果の匂ひ立つ  
齒磨のリズム整ふ今朝の秋  
魚市へ卸さるる香や秋の雨  
しなやかに靡くユーカリ天高し  
みせばやや銀山間歩は坂がかり  
数の子の戻るころあひ宵の客

# 水温む

三宅 進

目の前を流るる川に蝌蚪の群  
甚平を着込みお出かけ懇親会  
春寒しりハビリ効果まだ見え  
春兆す瀬戸の島々眩しくて

木の芽吹き見るたび毎に変わいく  
水温む稚魚の群にも変化あり  
あまりにも知らぬ木多しみどりの日  
垂れ下がる藤房長く潜り抜け  
雨に濡れ紫蘭しつかり蘇る  
くちなしの香漂ふ街外れ

# 花の中

山下裕子

梅咲くと聞けば華やぐ雨夜かな  
薄墨の夜明け明るく春時雨  
この町に淡き色さし春時雨  
風に聞く下津井節や雛かがり  
昼灯す商家の土間の古雛  
琵琶太鼓ピアノも加へ雛調度  
炊きあげて若布艶よく朝の市  
鉛筆で描く町並の春めきて  
雨あがり春山少し近くなり  
いく隧道抜けて駅舎は花の中

# 家族

與田武彦

座禪組みここまでこれた秋の月  
通草食べ昔にもどる甘さかな  
竹田城親子で登る冬日和  
静かなる水面に映る冬の山  
皆元気冬の金魚は家族かな  
寒明や蓄ふくらむ庭の木々  
風にゆれ一輪咲きしさくらかな  
瀬戸の海桃の節句の夕日かな  
朝早く家族そろって蜆汁  
薄曇り桜散りゆく札所かな

---

昨年の秋から今年の春は、  
家族で大河ドラマの黒田官兵衛の思い出の場所を尋ねて、その時代を想い、家族で語り、楽しい時間を過ごしました。

---

# 水色

米元ひとみ

図書館の特等席にゐる立夏  
つがひ鳥濡れて愉しき緑雨かな  
梅雨晴るるセガンテイーニの水色に  
口笛の名人さつと夏料理

出航の港ははるか星涼し  
万緑をふるはせてゐる三井の鐘  
涼しさやピアノに映る格子窓  
香水も笑みも仄かでありにけり  
お花畑さ走る雲に濡れゆけり  
新涼や窓の切りとる空の色

児島図書館の特等席は、二階の一番奥である。

この奥まった席のあたりは、人が通らないし、熱心に読書をしたいか勉強をしたい人に占められているので静かである。

何も予定のない日は、本を読んだり俳句を書き写したり、それに飽きればランチに行ったり色鉛筆ではがきに絵を描いたりして、一日遊んでいる。

取られた税金を取り戻している気分である。

# 逍遙

渡辺牛二

あての無き風を頼りの三尺寝  
警笛の尾をひく夜汽車星涼し  
ほつれより夕日零るる秋簾  
金風や高き脚立に腰を据ゑ

今回は、横着をして、雑誌「俳句」(KADOKAWA)で採って頂いた句の中から十句を選びました。  
題は「逍遙」と付けましたが、これは今の自分に合っているようで、結構気に入っています。  
「おいおい、逍遙と散歩は違うだろう」と言う声が聞こえてきそうですね。

昭和三十年発行の「初時雨」という古い俳誌に、面白い事が書いてありましたので紹介しておきます。

威銃鳴りつつ雀太りつつ  
大綿の風あるやうに漂へり  
かいつぶり水の中にもある日暮  
石路の花そこに日差のあるやうに  
忘れたる事の数ほど犬ふぐり  
病室の窓吹き上げて行く落花

霞は朝うすく、夕に深し  
霧は朝深く、夕にうすし  
春風は朝に寒く、秋風は夕に寒し。  
陽炎は消えて明るく、稲妻は消えて暗い。  
紅葉は峰より染め、花は麓より咲く。  
川音は昼静かに、夜さわがしく、海の音は昼騒がしく、夜静かなり。  
木の花は朝に開き、草の花は夕に開く。

◆たかがアンソロジー、されどアンソロジー、いざとなると難しいもので、やっと少しだけ模様替えが出来ました。

◆とは言うものの、上がってこなければどんな本になっているかはわからず、これを書いている時点では不安半分、楽しみ半分なのです。

◆皆さんより少し前に手にとり、さてホツとしているかどうか……。

◆また皆さんのご意見をお聞きしながら、良い方向へと反映していきたいと思いますのでよろしく願います。

◆今年の花時は満足に俳句を詠む間も無く終わってしまいましたね。

◆TVでは外国からの花見客が、桜の枝を自分の前に引き寄せてポーズ

をとるシーンを繰り返し流していました。

◆何もそこまでしなくてもと思うのですが、そこが文化の違いなのでしょうね。

◆しかしそれは同時に、日本に生まれた事を良かったなあと感じる瞬間でもありました。

◆そして、良かったなあと感じる事と言えば、その日本でこうして俳句と出会えた事です。

◆俳句と出会えたからこそ出会えた仲間や、感動や、美しい自然がたくさんあります。

◆もちろん、詠めなくて苦しい時も多いですが、詠めば心に残りますし、アンソロジーにも残りますね。

◆次号もよろしく願います。  
酒蔵の通れば匂ふ花の昼

(牛二)

## アンソロジー合歓 Vol.14

平成27年6月1日発行  
発行 合歓の会  
発行責任者 富阪宏己  
印刷 大友出版印刷  
大阪市生野区

連絡先  
〒701-0304  
岡山県都窪郡早島町早島 3991-144  
富阪宏己方

次号締め切り  
平成27年11月30日  
原稿送付先  
〒708-0015  
岡山県津山市神戸 719-7  
渡辺牛二  
Email : info@nemunokai.net  
Tel. : 090-8710-7067